
FAIRY TAIL ~ 海龍の二つ名を持つ者 ~

原石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAIRY TAIL 海龍の二つ名を持つ者

【Nコード】

N1118Y

【作者名】

原石

【あらすじ】

水の滅龍魔導士であるリョウマ「ポセイジオはフェアリーテイルの面々に振り回されながらも自分の大切なものを守るために過ごしていく」という大それた名目というハリボテを掲げて今日もリョウマはエルザの尻に轢かれてあっちこっちで大騒ぎをしていく……駄文ですがよろしく願います！

プロローグ（前書き）

リヨウマが奏でるもう一つのフェアリーテイルの世界をご堪能ください！

一つ言っときますが主人公は転サトの主人公とは一切関係ありません。

プロフィール

リヨウマ＝ポセイジオ

18歳

容姿&説明

青髪で微妙にツリ目。容姿はまともだが二枚目とは言われない。身長はエルザと同じぐらいだが、いつも腕一本でねじ伏せられている。

エルザの相棒。だがS級魔導士ではない。

七年前まで海龍シーサラに育てられていたがシーサラが突然姿を消し、孤独の身に。

そんな状態で途方に暮れていたリヨウマをマスターマカロフが見つけてフェアリーテイルに入れた。

魔法名

水の滅龍魔導士

服装

基本的に青いパーカーを着ている。両手にはシーサラがくれた青い指出しグローブを装着。

「うおおおおおおお!!」

今俺の目の前では赤く長い髪を持った鎧装着女が巨大な怪物を蹂躪している。

あ。今ので十体目だなー。

「はあああああああ!!」

十一体目十二体目十三体目……

今だから言うが俺の出番一切なし。

だって近くの岩場に腰かけて水飲める余裕があるぐらいだから。

彼女の名前はエルザ「スカーレット」。

フィオーレ王国最強の魔導士ギルド【フェアリーテイル】のS級魔導士だ。

エルザが所持している魔法の名前は【騎士くザ・ナイト>】。まあ、いわゆる騎士って奴だ。

エルザの魔法を分かりやすく説明すると早着替えできるお薦めアイテムってところ。

着替えの手間いらすだな。羨ましい。

「——て、うおお!?!」

俺がボーツと水を飲みながら考え事をしていたら突然顔のすぐ横を

デッカイ剣が通過していった。

今の剣は【黒羽の鎧】とセットになっている剣だな？

つつーことは……

「エルザさん！？ そんな危険なものを人に向けたら危ないっすよ！？」

「だったらお前も働け！ さっきから私ばかり戦ってるではないか！」

「そんなこと言ってもなー。エルザが強すぎて俺の出る幕全くないし」

「……………【換装『海王の鎧』】」

「わー！ 待て待てエルザ！ ストップ！ その鎧は完全に俺を殺しかかってる！」

【海王の鎧】というのは要するに水属性の魔法に対して最強を誇る鎧だ。

水属性の魔法を使う俺にとっては天敵そのもの。災害モンだ。

あ。俺、滅龍魔導士<ドラゴンスレイヤー>です。

あと、属性は『水』。要するに水の滅龍魔導士ってヤツだ。

巷ではカイリユーのリヨウマって呼ばれてる。

は？ ポケモン？ 何それ？ どっかのモンスター？

コホン。話を戻すぜ。

んで、七年前に海龍シーサラに捨てられた俺はフェアリーテイルの三代目マスターであるマカロフさんに拾われてフェアリーテイルの魔導士になったってワケ。

話の変え方が唐突すぎ？ それはアンタの慣れ次第ってことで。つつーワケでそんなこんなの経験をして今の俺がある。

まあ、フェアリーテイルには俺の他に一人だけ同じ滅龍魔導士がいる。

ソイツは火竜イグニールっていうドラゴンを見つけるのが今の目標

って言っていた。

というわけで俺の目標も一応シーサラを探すことってことで。今まで育ててくれたお礼とか言ってるないし。

「はあ！とお！てりやあ！」

「エルザ敵は逆方向！俺は味方！ デューユーアンダスタン！？」

「言語道断！」

「どついう意味だあ————つ！？」

エルザの鋭い斬撃を最小限の動きで回避していく。

コイツとの付き合いは長いから剣の間合いと軌道ぐらい理解している。

気を抜きさえしなけりや当たることはねえ！

『グウオツオオオオオオオオオオ！！！！』

するとまだ死んでいなかったデツカイ角を持ったモンスターが俺とエルザに向かって突っ込んできた。

それに対して俺たちは————

「「邪魔を、するなあああああああああ！！！！」」

ボコオ！

——魔法を使わず拳だけで沈黙させた。

「ふう。クエスト完了だな」

「お前はほとんど何もしていないだろう。これは私の手柄だから報酬は九対一だ」

「ちよつと話し合おうかエルザ君」

俺とエルザのクエストはいつもこんな感じのやり取りで締めくくられる。

結局報酬は八割程度持つて行かれた。

はあ……金銭的に余裕がねえ……

ここはフェアリーテイルのギルド。
そこはいつものように喧騒に包まれていた。

「何か言ったかクソ炎！」

「超うぜえよ変態野郎！」

普段から犬猿の仲で目があったら喧嘩ばかりしている炎の滅龍魔導士のナツⅡドラグニルと氷の造形魔導士のグレイⅡフルバスターが今にも掴みかかりそうな雰囲気でメンチをきりあっている。

「た、大変だあ——！！」

すると、ギルドの共同酒場に彼氏にしたい魔導士ランキング上位ランカーのロキが足をもつれさせながら転がり込んできた。その整った顔の表面には大量の冷や汗が噴き出している。

「どうしたのロキ？」

「エルザが……エルザが帰ってきた！」

「な、なんだってえ——！？」

フェアリーテイルの酒場にいる全魔導士が声をそろえて驚愕した。

一方その頃エルザ達はいつと……

「重え……」

「遅いぞリヨウマ。早くしないと日が暮れる」

「人に荷物持たせておいて随分な物言いだなオイ」

先日クエストで討伐したモンスターの角を依頼主の街の人々が装飾してくれてエルザにプレゼントしたまでは良かった。

でも……そのもらい物を何で俺が運ばにやあなんのだ……

「まったく……それでも水の滅龍魔導士か？」

「いやマジでそれ関係ないっす。だってこの角メチャクチャ重いんだから……」

ハッキリ言っただけ腰痛い。

ギルドに戻ったらすぐに家に帰って惰眠をむさぼってやる。

よし決めた。今日は睡眠デーだ。思いっきり休ませてもらうとしよう。

「なあエルザ。俺はギルドに着いたら家に帰って寝させてもら——」

「——」

「あ。そうだリヨウマ。仕事の成功の報告が終わったら闇ギルドの制圧に行くから準備をしておいてくれ」

ガン！ガン！

思わず地面を拳で殴る俺。

眼からは大量の涙が滝のように流れている。

俺は水系統の魔導士だから水分があるんだよ。滅龍魔導士だし。

滅龍魔導士は自分の属性のものを食べることで魔力を一気に回復することができる。

ナツは炎系統だからいつも火ばっか食べてる。

俺は水系統だが食べるとすれば一番、海水が望ましい。
でもここは内陸なので海水なんか取れるわけがない。

戦いの最中に水を飲めるわけないし。

だから俺は考えた。

どこにいても水を取り込める方法を。

そして俺は思いついたんだ。

空気中の水分を吸収すればいいんじゃない？と。

というワケで二年前にようやく空気中の水分を体内に取り込む修行を終えました。

今では魔力の枯渇知らず。

いやーこれが努力の成果ってヤツだね。エルザには相変わらず勝てねえけど。

「また仕事！？ いい加減休ませてくれよ！ここんとこずっと働きっぱなしで寝不足なんだって！」

「それは私も同じだ。だがな、闇ギルドのせいで弱き市民たちがおびえて暮らしているこの世を正さなくてはならないのだ！」

「それは確かに正論だけれども！なんだろうこのやるせない気持ち！一体どこへぶつけたらいいんだろうか！？」

「【呪歌くららバイ>】」

「はぁ？ 何だよそれ？」

聞き覚えのない名前だな。

「私も詳しくは知らない。しかし昨日寄った酒場でアイゼンヴァルトの連中がその話をしていた」

「俺が必死に宿探ししてた時か……」

エルザの命令で一番高い宿を探し続けていた俺はもちろんその話は知らない。

だつて足がパンパンになるくらい走っていたから。

「しかし罪無き人に対して良い効果をもたらす魔法ではないことは確かだ」

「まあ闇ギルドの連中が探すくらいだからな」

お。やつと着いたみたいだなー。

俺の目の前には巨大な建造物がそびえ立っている。

これがフェアリーテイルのギルドだ。

俺がここに入った時から改装すらされていないボロギルド。そろそろ耐えなおしてもしないのかねー。

「とりあえずナツと 그레이 に協力してもらつ」

「……言つこと聞くのかアイツら」

「私に逆らえるような実力じゃないからな。フッフ……」

「エルザさん目がマジで怖いっす……」

出会った当初のエルザは今よりもっとまとまった気がする。

いや顔は今のが美人だよ？

そうじゃなくて俺が言ってるのは性格のこと。

俺と何回もクエストに行っているうちにどっかに頭でもぶつけたんだろつか？

随分と黒い性格になっちゃって……

「そつえばフィアはどうしたのだ？ 今回のクエストにはついてきてないようなのだが……」

「ん？ ああ、アイツね」

フィアというのは六年前に山で拾った卵をドラゴンの卵と間違えて俺とエルザが孵化させた猫の名前だ。

……………うん。今の表現に疑問を持つのは痛いほどわかる。俺とエルザだってしばらく呆然としてたから。ナツも猫の相棒がいる。名前はハッピー。青毛の猫だ。因みにフィアの色は赤。ハッピーとフィアの魔法の名前は「翼<エーラ>」。その名の通り翼を生やして空を舞う魔法だ。その魔法のほとんどは俺とナツを運ぶために使用されている。

「アイツは多分だけど俺の家で眠ってるんじゃないの？ 基本的に面倒事が嫌いなタイプだしアイツは」

「そうか。それじゃあ闇ギルド討伐にフィアを連れて行くことにしよう」

「嫌全く俺の話から繋がる決定とは思えないしそもそもフィアの都合とか考えてないし特に俺の都合も！」

「いや、なのか……？」

「うつ」

俺と身長は同じぐらいのエルザが腰を落としてわざわざ上目づかいで俺を見てきた。ついでに言うのと左目の端には涙が浮かんている。どうせニセの涙だろうけどなあ……。エルザの右目は義眼だ。理由は知らない。エルザが教えてくれないからな。

俺は昔からエルザの涙が苦手だ。それは多分俺がエルザのことを好きだからだろうな。

好きな奴の涙は見たくない。そんなの常識だろ？

「いやじゃ、ない……」

「そうか！それはよかった！ならばともに正義の道を進もうではないか！」

「おー」

ほらやっぱりニセモノだった。

「うん。やはり持つべきものは相棒だな」

「そうですかー」

「では、早速入るとするか。我が家に」

「へーい」

俺とエルザはフェアリーテイルのギルドの中に入っていた。

プロローグ（後書き）

「もう、いや……」

By リョウマ

最強チームの結成（前書き）

「燃えてきたぞ！」

B
y
ナツ

最強チームの結成

「今戻った！マスターはおられるか！」

ざわざわ…

エルザがギルドの中に入った途端に酒場が騒然となった。
相変わらず恐れられてますねエルザさん。

「た…ただいま…」

ドンッ！！

エルザに遅れてギルドの中に入ってきた俺は酒場に着くなり背負っていたモンスターの角を床に置いた。
あー肩、痛え。よくまわしとかないと。

「な、なありヨウマ。そのデッカイの何だ？」

すると俺の傍に立っていたフェアリーテイルの仲間がそんなことを聞いてきた。

いやまあ確かに気になるでしょーね。

「俺とエルザで討伐したモンスターの角だ。地元の人が綺麗に飾りを施してくれてなあ。エルザが綺麗だからってここまで運んできたんだ。酒場に飾るらしいぞ？」

「マジかよ……」

「っていうかどんなサイズだよ……」

うん。俺だってその反応がしたかったさ。
自分が討伐したモンスターじゃなければ……

「それよりお前たち。また問題ばかり起こしているようだな。マスターが許しても私は許さんぞ」

「いや少しは手加減してやれよ……？」

「な……なにこの人たち……」

「鎧を着ている方がエルザで全体的に青いのがリヨウマ！二人ともすごく強いんだ！それにリヨウマは水の滅龍魔導士なんだよ！」
「へえ。ナツ以外にも滅龍魔導士がいたんだ……」

ん？ ハッピーと話してるのは誰だ？ 見ない顔だな……新人か？

「カナ……なんという格好で飲んでいる」

「う……」

「ビジター、踊りなら外でやれ。ワカバ、吸いながら落ちているぞ」

エルザの言葉に踊りをやめるビジター。

ワカバにいたっては吸いがらを手で集めてゴミ箱に運んでいる始末。
確かにこりゃ酷いな……

「ナブ……相変わらず依頼板の前をウロウロしているのか？ 仕事をしろ」

「エルザ、そこら辺にしといてやれって……」

ナブが心の底から悲しそうな顔をしてるからさ。

「まったく……世話が焼けるな。今日のところは何も言わずに置いてやろう」

「結構言ってますけどー？」

「ああ？」

「ゴメンナサイ。すべてエルザさんが正しいです」

「一瞬で敗北しちゃった！？ あの2人ってチームじゃないの！？」

「それがチーム【ドラグリーン】の実態です」

オイコラハッピー今すっごく聞き捨てならないセリフが聞こえたぞコラ。

するとエルザがハッピーの方を向いて数歩進んだ。

ん？ 早速あの話をする気か？

「ところでナツとグレイはいるか？」

「あい」

今自分の相棒を裏切りやがったぞこの青猫。

「や……やあ、エルザ……オ……オレたち今日も仲良し……よく……や……
……やってるぜい」

「あい」

「ナツがハッピーみたいになった！？」

新人さんの言うとおり、ナツがハッピーの口癖を言うだけの人形になっ
てしまっている。

そこまでエルザって怖いかね？

「そうか……親友なら時にはケンカもするだろう……しかし私はそう
やって仲良くしているのを見るのが好きだぞ」

「あ……い、いや……いつも言ってるけど親友ってわけじゃ……」

「あい」

「こんなナツ見たことないわ！？」

俺は帰ってくるたび見てるけどな。

ハッピー状態のナツと無駄にかしこまった 그레이 の姿。

この二人のエルザ恐怖症は相当なもんだからな。

「そうか。ところで実は二人に頼みたい事がある。リヨウマ」

「はいはい。今回の仕事先で少々やっかない話を耳にしてしまったんだ。本来ならマスターの判断を仰ぐトコなんだが早期解決がのぞましいと俺とエルザは判断した」

「二人の力を貸してほしい。ついてきてくれるな？ 私とリヨウマに」

ざわっ

エルザの言葉にその場が騒然となる。

そりゃそうだ。普段から俺と二人でしか仕事に行かないエルザがフェアリーテイル内でもトップクラスの力を持つナツと 그레이 に頼みごとをしたんだから。

まあ、事情が事情だししょうがないか。

「出発は明日だ。準備をしておいてくれ」

「え…ちょ」

「エルザ!？」

ナツと 그레이 の言葉を全てシカトしながらエルザは住居であるフェアリーテイルの女子寮に戻っていった。

その場に残された俺たちはしばらく黙りこんでいた。

まあ、状況がつかめなかったし。

「おいリヨウマ！どんだけヤバい仕事なんだよ！？」

「なんで俺がこんな変態野郎と一緒に仕事に行かなきゃいけないんだ！！」

「知るか！エルザの独断だ！」

「「独断！？」」

「エルザって独裁者？」

「あい。似たようなものです」

「クソッ。こんなヤツと一緒に組むってだけでも吐き気が出るのに

……」

「んだとコラア！？」

「やんのかクソ炎！」

「上等だクソ脱衣魔！」

「いい加減にしろ！！」

ゴイン！！

あまりにナツと 그레이 の言い争いが面倒くさかったので魔力を少し込めたゲンコツで沈黙させる。

圧縮はしていないので二人の皮膚が切り刻まれることは無い。水って圧縮するとなんでも斬れますからね！。

「んじゃ俺も帰るわ。また明日なー」

俺はそう言い残して自分の家に向かって歩いて行った。

「リヨウマにエルザにナツに 그레이 ……これは最強チームになるかもね……」

ミラが何かつぶやいていたが俺の耳にはよく聞こえなかった。

俺の家はギルドから歩いて数分のところにある。
見た目も中身も何の変哲もない一軒家。

位置的にはフェアリーテイルの女子寮の近くだ。

別に俺が望んでココに作ったわけじゃない。だってこの家はエルザからプレゼントされたものだから。

確か俺がフェアリーテイルに入ってからちょうど一年たちましたよ記念
かなんかだった気がする。

昔からアイツはサプライズ精神満点だったからなあ。

がちや

「……………おかえり」

俺が家の中に入ると玄関に真っ赤な毛並みの猫が立っていた。

コイツが例の猫であるフィア。

俺とエルザが孵化させた猫だ。

「ただいま。ところでフィア、明日は暇か？」

「……………別に何も用事が入ってない」

「そりゃよかった（ニヤニヤ）」

「……………なんだそのニヤケは……………」

俺のにやけた顔を見て思わず二三歩後ろに後ずさるフィア。そんなフィアを見て俺はさらに笑みを深くしてこう言った。

「明日はエルザと一緒に闇ギルドの討伐だ」

フィアはその場から逃走しようとしたが俺によってすぐにとらえられた。

道連れは多い方が良い。

つつーわけで作ってきましたマグノリア駅。

今、俺の隣では荷物を全部俺に押し付けたエルザがフィアを抱いてもふもふしていた。

もちろん鎧は着ていない。フィアの毛の感触を味わえないからだ。

「久しぶりだなフィア！元気にしてたか？」

「……………まあまあ」

「相変わらず愛想のない奴だがこの感触がたまらん！」
「……………エルザ、苦しい」

今のフィアはエルザが思いつきり抱き寄せているのでエルザの豊満な胸に顔が埋まっている状態だ。
代わってくれないかな……………うらやましい。

「エルザではなく【お母さん】と呼んでくれていいんだぞ？ お前は私とリヨウマの息子だからな！」

「……………随分と若い母親だな……………」
「っ／／／／」

エルザのヤツどんだけ古い話題を引つ張り出してくるんだ……………
今エルザが言ったことは俺とエルザがフィアを孵化させたばかりのころにエルザがふざけて言ったことだ。
何故か顔が真っ赤だったけど。

「エルザさーん？ そろそろいかないと乗り遅れちゃうぞー？」

俺たちの目の前にはメンチをきりあっているナツとグレイと遠目でそれを見ているハッピーと例の新人さんがいる。
おそらく俺たちが来るのを待っているんだろう。

「それはそうなんだがこの感触をもう少しだけ味わっておきたい」
「味わっていいから列車に乗ろう。マジで乗り遅れるから」
「分かった」

やっと言うこと聞いてくれたよ……………エルザの手綱はしっかり握っておかないといつ暴れだすか分かったもんじゃない。

「荷物多っ!？」

俺たちがみんなのところに行くとな新人さんが俺が引いている滑車を見てそうツツコんだ。

ま、まともな新人だ…… やつとあのギルドにも常識人が……!

「ん? 君は昨日妖精の尻尾くフェアリーテイルくにいたな……」

「! 新人のルーシイといます。ミラさんに頼まれて同行するこ
とになりました。よろしくおねがいます」

エルザの問いにルーシイはぺこりと頭を下げて自己紹介をした。

礼儀正しい。やっぱりまともな人間のような。何故か親近感がわく

……

「私はエルザだ。こっちは私の相棒のリヨウマ。そして今私が抱いているのが私たちの息子のフィア。いつもは私とリヨウマとフィアでチーム「ドラグーン」を組んで仕事に行くんだが今回は事情が事情だ。よろしく頼んだぞ」

「どうも。水の滅龍魔導士のリヨウマだ。フィアが息子っていう発言はスルーしてくれて構わない。コイツの戯言だから」

「戯言だ?!？」

「…………… 話が進まないから少し黙ってる。オレはフィア。そののハッピーと似たようなものだと思うてくれればいい」

「ということは背中から羽が生えたりするの?」

「フィアの【翼くエーラく】は凄いいんだよ! オイラよりも速く飛べるんだ!」

「…………… 魔法はコツさえつかめればどこまでも上達する。ハッピーもそれさえ掴めればオレより早く飛べるさ」

「大人!!! この猫ちゃんすっごく大人ね!」

「…………… な、撫でるな……………」

ルーシイに手を振り払ってエルザに抱き着くフィア。
いやマジで変わってくれませんかフィアさん。

そのポジションに一度でいいから触れてみたいっす！

「なあエルザ。今回の仕事について行く代わりに一つ条件を付けて
良いか？」

「条件？ 言ってみろ」

「この仕事が終わったらリヨウマとエルザと決闘させる。次こそは
負けねえ。あの時とは違うんだ」

「！！！！」

「お、オイ！はやまんって！」

「だ そうだ。俺は別に構わねえけどエルザは？」

久しぶりにナツと決闘したいとは思っていたからなー。

新技も試したいし。

「ふっ。いいだろう。本気で相手してやる。グレイはどうする？」

「（ブンブンブンブン！）」

首が取れるんじゃないかなろうかという錯覚を覚えさせるぐらい首を横
に振るグレイ。

そんなに戦いたくないのか……まあ、グレイは俺に相性悪いからな。

「よし！ 燃えてきたあ——！！やってやるっじや
ねえか！！」

ナツが体中から炎を吹き出してマグノリア駅中に響き渡るぐらいの

大声で歓喜した。

最強チームの結成（後書き）

「べ、別に私はリョウマのことなどっ／＼／」

B y エルザ

列車の中の出来事（前書き）

「……………はあ
」

B
y
フ
イ
ア

列車の中の出来事

「もう列車なんか乗らねえ……」

先ほどの威勢はどこにいったのか列車に乗った途端にナツがグロッキー状態になってしまった。

相変わらず乗り物には弱いようだな。

どうやったら乗り物酔いって治るんだろう？

「ナツうつとうしい。お前はもう列車に乗るな。走れ」

「いやそれは無理だから」

「ナツって相変わらず乗り物に弱いわよねー」

俺とエルザが仕事に行っている間にナツと何度も仕事に行っていたらしいルーシイがニヤニヤしてナツを見ながらそう言った。
あれ？ この子って意外とスっ気があります？

「しょうがない奴だな。私の隣に來い」

「あい……」

「どけてることかしら……」

何イ！？ エルザがナツを自ら自分の隣に誘うだとオ！？

いや落ち着け俺。あのエルザのことだ。どうせナツを乗り物酔いの苦しみから解放するために――

ぼこおっ！

「ぐはあ！？」

——意識を刈り取るだけだろうから。

「ん？ どうしたリヨウマ。なんで私の顔をじっと見ているんだ？」
「その状態のナツを膝枕でもする気なんか？」
「ああ。ま、まさか……お前も膝枕がしてほしいのか！？ / / /」
「違うわばけえ！ 子供じゃあるまいし！ しかも顔を赤く染めるな！」
「（怒）」

一瞬

その言葉でしか表せないほど速く、エルザはボディブローで俺の意識を刈り取った。
な、なんで……？

「ルーシィ、ナツを頼んでもいいか？」
「は、はあ……」

リヨウマの鳩尾に文字通り鉄拳（箆手を着けているから）を食らわせて膝枕することに成功したエルザはこれまたいろんな意味でグ

ロッキー状態のナツをルーシイに渡す。

ルーシイは自分の隣に一人分の隙間が開いていたのでそこにナツを寝かせて膝枕をする。

その光景の一部始終を目の当たりにしていたグレイ、ハッピー、フイアは静かに心の中で合掌した。

「そういえば私ってナツ以外の魔法を見たことないなあ。リヨウマさんとエルザさんってどんな魔法を使うんですか？」

「エルザの魔法は凄いいんだよ！相手の血がいつぱい出るんだ！」

「それはキレイというのかしら……」

「……………ハッピー、それはキレイとは言わないぞ」

「別に私もリヨウマも【さん】付けしなくてもいい。なんだか歯がゆいからな。リヨウマの魔法はナツの水バージョンと思ってくれればいい。ナツとの違いと言ったら属性と攻撃の種類ぐらいだからな。コイツの滅龍魔法はナツのように殴るではなくてどちらかというと

【斬る】だ」

「斬る？ 水なのにな？」

「ルーシイ、水を圧縮するとどうなるか分かるか？」

「えっと……………水圧が上がるんじゃないかしら？」

「そう。リヨウマの使う滅龍魔法は主にその性質を生かした魔法なんだ。まあ、リヨウマの場合は攻撃よりも防御の方が得意だがな。だからいつも私はコイツから守ってもらってばかりだ」

「防御？なんで？龍の迎撃用の魔法なんですよ？」

「……………リヨウマは滅龍魔法によって水の圧力を限界まで上げることが出来るからほとんどの攻撃を防ぐことができる」

「リヨウマの前では私の攻撃も歯が立たん。まったく…こいつは強いんだか弱いんだか……………」

エルザがリヨウマの髪を指で梳きながら微笑を浮かべて呟いた。気絶させられたリヨウマは何故か無邪気な寝顔を浮かべている。

連続の仕事続きで疲労しているようだ。

「へえ。で、エルザはどんな魔法を使うの？」

「私の魔法は見ても全く面白くないぞ。それより私はグレイの魔法が一番きれいだと思うがな」

「グレイの？」

「そんな大層なもんじゃねえよ」

そう言つてグレイは自分の前の両手を出して左手の甲を下に向け、その上に握った状態の右手を置く。

すると、グレイの右手と左手の間から冷氣のようなものが漏れ出した。

そして――

「まあざつとこんなモンだろ」

――グレイが右手をどかすと左手の上にフェアリーテイルの紋章の氷像が鎮座していた。

そう。グレイは氷の造形魔導士なのだ。

「うわぁ！すごい！っていうか氷って……似合わないわね。ぷぷう」

「ほつとけ」

「ん？ ちょっと待つてよ……ナツとグレイ……火と氷……ああ！だからあんたたちって仲が悪いのね。子供みたいでかわいいー」

「そうだったのか？」

「どうでもいいだろそんな事ア！」

図星を突かれたグレイは顔を赤く染めて窓の外に視線をやった。そしてこの後ルーシィがエルザにとんでもないことを言い出す。

「あ、そうだ。ねえエルザ。昨日から気になってたんだけどリヨウマとエルザって付き合ってるの？」

「ッ！？／／／ ごほっ！けほっ！」

ルーシイの何気ない質問に飲んでいたコーラをのどに詰まらせるエルザ。

喉と胸を抑えて悶えている。

しかし、エルザの顔が赤いのは呼吸困難のせいではないだろう。

「きゅ、急に何を言い出すんだ！」

「だってリヨウマとエルザって昔からチーム組んでるんでしょ？
ねえどこまで進んでるの？ A？B？もしかしてC？」

「すまないルーシイそのアルファベットは一体どんな意味なんだ？」

「あー……知らないパターンね。じゃあ言い方を変えるわ。リヨウマとエルザってキスしたことある？」

「……（ば、バカルーシイ！その話題はエルザに振っちゃだめだ！
！）」「」

先ほどから黙り込んでいた一人と二匹が顔を青ざめさせて、同時に心の中でルーシイに訴えかけていることなど知る由もないルーシイはエルザの回答をニコニコと笑顔で待っていた。

「き、ききききききキス！？ べ、別にしたことでもないではないがしてしまったこともあったりなかったり……／／／」

「どっちなのよ」

「っ！／／／（かあゝっ）」

「……………エルザとリヨウマは今年のエルザの誕生日の日にキスしてた」

「「ファイア！？」」

「な、なななななななな」

「グレイ隊長！エルザが壊れました！」

「お、俺に振るな！と、とりあえずほっとけ！」

フィアのしれつと暴露に耳の先まで真っ赤に染めたエルザは意味不明な言葉を発しながら混乱してしまった。

その周りではフィアの予想外の行動にテンションがおかしくなっているグレイとハッピーを苦笑いで見ているルーシイがいる。

「へえ……（ニヤツ）　ねえフィア？　二人はこういう流れでキスしたのお？」

「……………エルザが『誕生日のプレゼントはリヨウマのキスが欲しい』と言ったのでリヨウマが顔を真っ赤に染めぐっ！？」

——（くたっ）——

更にエルザの黒歴史を暴露しようとしたフィアの首元に手刀を決めて気絶させたエルザはハッピーに向かってその亡骸を放った。

「まったく……フィアの冗談にも困ったものだ。つい調子に乗ってあることないこと言ってしまう」

「……ホントはそれ以上まで行こうとしてたくせによく言っぜ……」

……

「ああ！？」

「はいスイマセン僕が悪かったです生きててごめんなさい」

「瞬殺ね！？」

ぼそつと文句を言ったグレイはエルザの一睨みでその場に土下座を決める。

フェアリーテイルにはこうした上限関係が構築されているのだ。

「そ、それより本題に入らない？」

「賛成だな。つーかエルザ、今回は一体何事だ？ お前みたいなバケモンが人の手を借りたいだなんて よほどだぜ」

「そうだな……話しておこう。つい先日のことだ。私がリヨウマの宿探しを待っている間の話なのだが――」

そしてエルザは酒場であつた話をルーシィ達に話した。

その話を聞き終わったルーシィとグレイは話に出てきたひとつの単語に疑問符を浮かべる。

「ララバイ？」

「子守唄……眠りの魔法か何かかしら？」

「分からない……しかし封印されていると聞くとかなり強力な魔法だと思われる」

「話が見えてこねえなア。………得体の知れねえ魔法の封印を解こうとしてるやつらがいる……ただそれだけだ。仕事かもしれねえし何て事アねえ」

確かに今の話だけを聞いた限りだとグレイの言うとおり気にするようないふことじゃないだろう。

ただのちんけな闇ギルドが封印されている強力な魔法を解こうと必死になっているだけだ。

しかしこの後のエルザの言葉を聞いてその余裕は一瞬で吹き飛ぶこととなる。

「そうだ。私も初めは特に気にかけていなかった………エリゴールという名前を思い出すまではな」

ポォー

カンカンカン

エルザの言葉に続く形で列車が走る音がその席に響いていた。それはその席が静寂で包まれているということを表していた。

「魔導士ギルド【鉄の森<アイゼンヴァルト>】のエース 死神 エリゴール」

「し…死神!？」

「暗殺系の仕事ばかりを優先して受け続けた結果ついた字だ。本来、暗殺依頼は評議会の意向で禁止されているのだが鉄の森は金を選んだ」

列車から降りながら巨大な滑車を引いたエルザはルーシイ達に話を続ける。

「結果…6年目に魔導士ギルド連盟を追放……現在は闇ギルドというカテゴリーに分類されている」

「や、闇ギルドお!？」

「ルーシイ、汁いっぱい出てるよ？」

「汗よ!！」

エルザ達が帰ってくる前に闇ギルドのことをミラジーンから聞いていたルーシイは体中から冷や汗を出して恐怖する。

「なるほどねえ……」

「ちよつと待って!追放って…処罰はされなかったの!？」

確かに暗殺の依頼ばかり請け負っていたという罪があるなら処分程度の罰ですむはずがない。

「されたさ。当時、鉄の森のマスターは逮捕され ギルドは解散命

令を出された。しかし、闇ギルドと呼ばれるギルドの大半が解散命令を無視して活動し続けているギルドのことなのさ」

「……………帰ろっかな……………」

「出た」

駅の出口に向かって歩き出そうとするルーシーにハッピーが鋭いツツコミを入れる。

フィアは何故か考え込んだような表情でそこに浮かんでいる。

「不覚だった…あの時エリゴールの名前を思い出していれば……………」

……………全員血祭りにしてやったものを……………」

「ひいいっ!?!」

怒りに満ちたエルザから放たれる黒いオーラに鳥肌を浮かべて恐怖するルーシー。

今のエルザの背後には間違いなく修羅が降臨しているだろう。

「だな……………その場にいた連中だけならエルザだけで十分だったかもしれないねえ。少し待てばリヨウマも加勢に来るだろうからな。だがギルド一つ相手ともなると……………」

グレイの現実的な一言に小さく頷くエルザ。

エルザだって自分の実力ぐらい理解している。

たった一人で一つのギルドを潰すという子尾が難しいことぐらい分かっているのだろう。

まあ、無理ではなくて困難と思っている辺りがエルザがいかに強いかを物語っているのだが……………」

「奴らはララバイなる魔法を入手し何かを企んでいる。私とリヨウマはこの事実を看過する事は出来ないと判断した……………鉄の森に

乗り込むぞ」

絶対に悪を許さないエルザが真っ直ぐな瞳でグレイたちを見つめた。そしてグレイはその言葉に頷く。

「面白そうだな」

「来るんじゃないかった」

「汁出すぎだつて」

「汁って言うな」

駅のホームを出たエルザ達はひとまず荷物を置くために宿を求めて街を歩くことにした。
そして街の住宅街に着いた時にとある一つの問題が浮上することとなる。

「で……………鉄の森の場所は知ってるのか？」

「それをこの街で調べるんだ」

「……………なあ」

「えー？ ちょっと嘘でしょ！？」

「「ナツとリヨウマがいないんだが（いないんだけど！？）」「」

「「……………ええ！？」「」

ガタンゴトン……

「ぐう………」

「はぁ……はぁ………」

列車に取り残された乗り物酔い状態で苦しむナツと熟睡しているリョウマはひたすら列車に揺られていた。

「お兄さん　ここ空いてる？」

すると黒い髪を後ろでくくった青年がその向かい側の席に腰を下ろした。

「あらら……辛そうだね　大丈夫？」

「ぐう………」

「ふう——はぁ——」

これだけを見ればかなり親切な優しい青年だろう。
だがしかし——

「妖精の尻尾くフェアリーテイル>………正規ギルドかぁ」

青年は苦しんでいるナツと眠っているリョウマを交互に見詰めて二タリと笑った。

「うらやましいなあ………」

この青年の名前はカゲヤマ。
闇ギルドの鉄の森に所属している魔導士だ。

列車の中の出来事（後書き）

「妖精くハエ>パンチ」

B
Y
リヨウマ&ナツ

<ララバイ>の正体（前書き）

「水の滅龍魔法は防御系が多いんです」

B
Y リヨウマ

<ララバイ>の正体

「正規ギルドは可愛い子が多いんだねえ……少しぐらい分けてよ」

異なる意味でダウンしているナツとリヨウマをニヤニヤしながら見ているカゲヤマ。

その笑みの中には憎悪と妬みが混在している。

「……………シカト？ それは闇ギルド差別だよ。妖精の尻尾って何て呼ばれてるか知ってる？ ハエだよ、ハエ」

するとカゲヤマは座席から立ち上がって少し助走をつける。
そしてダウンしている二人に向かって――

「ハエキ――ツク&ハエたたき――！」

座ってグロッキー状態のナツの顔面に飛び蹴りを決めて寝ているリヨウマの顔面にパンチを叩き込んだ。
もちろん意識が薄いナツと意識が無いリヨウマが避けられるはずもない。

「……………ああ？ 誰だてめえ……………」

「痛っ！？」

「やっと返事してくれたよ。まったく、これだから正規ギルドの魔導士はイラつくんだよね。自分たちが絶対の正義とか勘違いしちゃってさあ。バカじゃねえの？ ヒヤハハ！」

下卑た笑いを表に出しながらナツとリヨウマを上から見下す。

この青年は二人が反撃できないと思っているようだ。

「……………【海龍の鉄拳】！」

「うごお！？」

そして眠りから覚めたフェアリーテイル最強のチームの滅龍魔導士がカゲヤマを吹っ飛ばす。

「誰だテメエ？」

なんか目え覚める前に顔面殴られた。

全く意味が分かんねえし状況がつかめねえ。

とりあえず目の前のウゼエちゃんまげっぱい髪型の野郎をぶっ飛ばしておきました！

「て、テメエ！鉄の森くアイゼンヴァルトくに出してタダで済むと思ってるのか！？」

「ああ？ 眠ってる人の顔面を攻撃するぐらいしかできねえ弱虫野

郎が集ってるギルドなんか怖くもねえよ。それに鉄の森？ 闇ギルドじゃねえか。ん？ そういえばエルザが探してたギルドも鉄の森だったような……」

「な、なにをブツブツ言ってるんだ！」

そうだよ。エルザが潰すって言ってたギルドも鉄の森だったじゃないか。

いやー運がいいね。こんなところでターゲットに遭遇ってたか？ 日ごろの行いが良いからかねー

「いやー今日のお前は運が良いぜ。なんてったって俺の滅龍魔法を全部受けることができるんだからな」

「め、滅龍魔法！？」

「ん？ 闇ギルドだから知らねえか？ じゃあ教えてやるよ。俺はリヨウマⅡポセイジオ。妖精の尻尾の水の滅龍魔導士だ」

「ま、まさかお前が海龍<リヴァイアサン>!？」

なんか俺の二つ名がパワーアップしてますねハイ。
まあ、噂という物には尾ひれがつくものだからなあ。

「——ん？ なんだその妙に禍々しい笛？」

ウザ男の足元に何か髑髏のような形の木の笛が転がっている。
うーん……どつかで見たような……ってうおお!？

キキ————ッ！

「なっ!？ 急停車か!？」

「とまった……?」

「ん？ お目覚めかナツ。とりあえず一緒にこのウザ男殴んねえ？」

「了解（ニヤッ）」
「「セーの……」」

俺とナツは右手に魔力を込めてウザ男の顔面めがけて――

「【海龍の鉄拳】！」

「【火竜の鉄拳】！」

――パンチを叩き込んだ。

「げばお！？」

おおー……壁に激突した……弁償とかしないでいいよな……？

『先ほどの急停車は誤報だということが発覚しました。これより再発車します』

「やべえ！？ 逃げよう！」

「え？ ちょ、マジイ！？」

ナツが光速で荷物を纏めて俺の首根っこ掴んで列車から飛び降りた。この速さで落ちますか貴方は！

「ってなんでお前ら列車から飛び降りてくるんだよ！？」

あ。 그레이가魔導四輪の上に載ってる。

ああー……これはぶつかるな。

ナツが

ゴーン！

「うぎゃあ——！？」

「よっと。うわあ、いたそー」

流石にこの速さで頭を打つのは重傷だと思うので水のクッションで無事に地面に着地。

こういう時って水は便利です。

「無事だったかりヨウマ！」

「ん？ この魔導四輪を運転してたのってエルザだったん？」

運転席の方から降りてきたから間違いなくそうなのだろうけど。

「っ……」

「おっと。ったく、魔力の使い過ぎだバカ」

魔導四輪は運転手の魔力を消費して走行する乗り物だ。

もちろん走行速度と距離に消費魔力は比例する。

いくら強大な魔力を持っているエルザでも辛いものは辛いだろう。

「それにしてもあのちゃんまげ野郎後で覚えてろよ……皮膚を一枚一枚削ってやる。クケケ……」

「リヨウマって意外とSなのね……」

「あい」

人の顔面にパンチを叩き込みやがったからな。
この恨みは忘れん。

「ん？ リヨウマ、そのケガは何だ？」

「これか？ これはさっき列車の中でアイゼンヴァルトの魔導士に

寝てるときに顔面殴られたんだよ」

「アイゼンヴァルトだと！？ この、バカモノオ——！！」
「げばらあ！？」

何故か顔面にビンタ喰らった。
メチャクチャ理不尽だったの。

「な、なにすんだ！？」

「アイゼンヴァルトが今回の私たちの目的だと説明したはずだ！何故取り逃がした！」

「ナツが俺の首根っこ掴んで列車からダイブ決めたからだ！」

「（ぐるん！）」

「ご、ごめんなさい……」

エルザが怒る修羅のような形相で睨んだとたんにナツがしゅんとして謝罪した。

相変わらずこの上下関係は凄いな。

エルザに刃向かえるのってラクサス以外にいるのかねえ？

「そついえばあの魔導士変なもの持ってたぜ？」

「変なもの？」

「ああ。なんか髑髏みたいな木の笛持ってた。三つ目だったかなあ……」

すげえ禍々しかったから印象に残ってる。
しかも魔力が込められてた。

あれは相当ヤバイもんかもしれない。

「三つ目……髑髏……」

「どしたのルーシィ？」

「…あ！それがララバイだ！呪歌<ララバイ>死の魔法！」

「死の魔法？」

「あたしも本でしか見たことが無いんだけど、禁止されてる魔法の一つに呪殺ってあるでしょ？」

「ああ……その名の通り対象者を呪い【死】を与える黒魔法だ」

「呪歌<ララバイ>はもつと恐ろしいの」

怖ろしい？いや確かに呪殺は怖えけどそれがなんでララバイに関係してんだ？

ララバイが笛ってんならもつと別の使い方がありそうだが……

……ん？

待て。今何が引つ掛かった？

考える……

笛………呪殺………呪歌………広範囲………！

「お、おいルーシィ。ま、まさかララバイって……」

「気づいたのね。そう、ララバイは集団呪殺魔法。その笛の音を聞いたものに等しく【死】を与える最悪で最凶の魔法具なの」

そんなもの使って鉄の森てつのもりは一体何をしようとしてるんだ……？

まあ、とりあえずはあの魔導士を追った方が良くかもしれない。

「行こうぜ。この先の駅に鉄の森がいるはずだ。誰かが殺される前に止めねえと」

妖精の尻尾おれらは絶対的な悪を絶対に許さねえ。

<ララバイ>の正体（後書き）

「火の滅龍魔法は攻撃ほとんどだ！」

B
y
ナツ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1118y/>

FAIRY TAIL ~ 海龍の二つ名を持つ者 ~

2011年11月5日21時18分発行